

レビ記11章「食物規定にある主の聖さ」

1A 陸の動物 1-8

2A 水の動物 9-12

3A 空の動物 13-19

4A 四つ足の動物 20-28

1B 羽のある群がるもの 20-23

2B 死骸による汚れ 24-28

5A 地に群がるもの 29-38

1B 腹で這うもの 29-31

2B 落ちてくる死骸 32-38

3B 食べてはならないもの 39-43

4B 聖なる者 44-45

6A 汚れと清さの区別 46-47

本文

レビ記 11 章を開いてください。私たちは前回まで、祭司のいけにえについて見て行きましたが、祭司が聖所に入る時に、異なる火を献げたために、主からの火で焼かれてしまったという事件を、10 章で見ました。そこで主は、11 章から 15 章までに、汚れときよめの区別について教えると語られました。「10:10-11 こうしてあなたがたは、聖なるものと俗なるもの、また汚れたものときよいものとを分け、また、【主】がモーセを通してイスラエルの子らに告げたすべての掟を、彼らに教えるのである。」

11 章は、食べることのできるきよい動物と、汚れている動物の区別です。12 章には女の出産時の出血について、13-14 章にはツアラアト、あるいは、らい病について、15 章には漏出する体液についての汚れです。そして 16 章で主は、ナダブとアビフが犯した過ちに戻られて、アロンが行なうべき、宥めの日のいけにえの教えを与えられます。

動物の区別については、実は創世記 7 章にて、主がノアに対して、箱舟にはいる動物の中で、清い動物と清くない動物を雄雌七つがいつづを取りなさい、という命令を行なわれています(2-3 節)。それを主は今、モーセとアロンにはっきりと、イスラエルの日常生活の中でその区別をお見せになります。

この箇所が、私たちに何の関係があるのか？ともしかしたら思われているかもしれません。読み進めれば豚は汚れていることが分かりますし、イカやタコ、貝も駄目です。私たち日本人は多くの

寿司を食べることができなくなるでしょう。まずその質問に対しては、「大いにある」と言うべきでしょう。新約聖書で「きよい」と「汚れ」という内容は数多く出てくるからです。私たちがこの世で生きていながら、この世の価値観と妥協することなく、自分が聖なる民として生きなさいという命令が与えられています。コリント第二 6 章 14 節から 7 章 1 節までお読みしたいと思います。

不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神がこう言われるとおりに。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。——主は言われる——汚れたものに触れてはならない。そうすればわたしは、あなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。——全能の主は言われる。」愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、肉と霊の一切の汚れから自分をきよめ、神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか。

そして私たちが「食べる」という非常に日常的な生活の場面において、そこでも主の栄光を現さなければいけないことを使徒パウロは教えています。「 I コリ 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

けれども、私たちがこれらの食物規定を守るべきかどうかは、新約時代の教会として「いいえ」とはっきりと言えます。イエス様は、すべての食物をきよいとされました。「マル 7:18-19 イエスは彼らに言われた。「あなたがたまで、そんなにも物分りが悪いのですか。分からないのですか。外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。それは人の心には入らず、腹に入り排泄されます。」こうしてイエスは、すべての食物をきよいとされた。」パウロは、コロサイ書 2 章 17 節では、食べ物については「これらは、来たるべきものの影であって、本体はキリストにあります。」と言いました。ですから、教会はこれらの食物規定を守る義務はないのです。

イエス様は、食べ物は排泄ことを述べた後で、汚れは内側から来ると言われました。「マル 7:20-23 人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」いかがでしょうか、汚れは私たちに非常に身近な問題です。目の前にある心の問題です。

したがって私たちがこれから読む箇所は、私たちの霊的生活の聖さを表している影のようなもの、目で見える形で「清い」とは何を表しているかを教えている箇所であります。ある人たちは、11 章から 15 章までの律法は、衛生を考えていると言います。例えば豚は汚れていますが、豚を冷蔵す

る器具がない時代では、その中にある寄生虫を考えてのことだ、と言います。そのような面はあるでしょう。けれども、一義的には霊的な側面を映し出す教材と言えます。

1A 陸の動物 1-8

¹主はモーセとアロンに告げて、こう彼らに言われた。²「イスラエルの子らに告げよ。次のものは、地上のすべての動物のうちで、あなたがたが食べてもよい生き物である。

初めの分類は「陸の動物」です。神が六日目に創造された被造物です。

³動物のうち、すべてひづめが分かち、完全にひづめが割れているもので、反芻するもの。それは食べてもよい。

清さと汚れの区別を決めるのは、「蹄が完全に分かちられている」と「反芻をする」ことです。どちらかが抜けていても汚れています。

⁴ただし、反芻するもの、あるいは、ひづめが分かちられているものの中でも、次のものは食べてはならない。らくだ。これは反芻はするが、ひづめが分かちされていないので、あなたがたには汚れたものである。

「らくだ」は中東のありふれた動物で、最も大きな動物です。私たちがエジプト旅行をしたときガイドさんが、エジプト人はらくだを食べることを聞きましたが、ユダヤ人は食べません。ところで、ユダヤ人は今でも、特にイスラエルにおいて「コシェル」と呼ばれる食物規定を守っています。コシェルは、ここレビ記 11 章、また血を食べてはいけないという教えを守ります(レビ 17:14 等)。それから、「出 23:19b あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない。」という戒めから、拡大解釈して、乳製品と肉製品と一緒に食べてはならないという規定もあります。

らくだについてですが、イエス様がパリサイ人にあなた、「マタ 23:24 目の見えない案内人たち。ブヨはこして除くのに、らくだは飲み込んでいます。」と言われました。ものすごい皮肉です。ぶよは、後で出てきますが、四つ足の羽がついたものは食べてはならないとありますが、汚れた動物です。そして、ぶよが血を吸っている可能性がありますから、その血を食べることになります。こうした細かいことに気を使っているのに、汚れた動物であるらくだを食べている、と言われているのです。

⁵岩だぬき。これも反芻はするが、ひづめが分かちされていないので、あなたがたには汚れたものである。⁶野うさぎ。これも反芻はするが、ひづめが分かちされていないので、あなたがたには汚れたものである。

「岩だぬき」と「野うさぎ」ですが、厳密にはどちらも反芻しません。その草を一生懸命、むしゃむしゃ食べている姿は反芻している姿と似ています。

では、聖書の記述が間違っているのか？そうではありません。ここは聖書を解釈する時にとても大事なことです。目に見える姿を表現しています。聖書には、そういった表現が数多く出てきます。例えば、蛇について、主は、「創世 3:14 おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる。」と言われました。蛇は地面の塵を食べて生きていません。しかし、そのように見える姿を生き生きと描いているのです。同じように、かつて、らい病と訳されていたレビ記 13-14 章の箇所ですが、壁のカビまでが、らい病と表現されていました。今は、ツアラアトとそのまへブル語を使っていますが、人の皮膚にできた重い皮膚病も、壁にできたカビも、同じツアラアトを使っているのです。これは、ひとえに「人が見た姿」を形容しているのです。例えば、今現代でも、「雲のように煙が立ち上っている」みたいな、言い方をしますね？「ように」と付け加えて比喻であることを断るのですが、聖書ではそのまま、見えるものを言い表していることがあるのです。

⁷ 豚。これはひづめが分かれていて、完全に割れてはいるが、反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。

豚は汚れた動物の典型例で、ユダヤ人のみならずイスラム教徒にも忌み嫌われています。反芻しないどころか、餌を食べあさる姿が特徴的です。イエスが、「真珠を豚の前に投げてはいけません。」と言われましたが、汚れた動物とみなされているから、汚れたもの、価値のないものに、価値あるものを持っていてはいけないことを表現されたのです。それから、悪霊レギオンを豚の群れの中に移されましたが、そこがガリラヤ湖畔であるにもかかわらず、デカポリスである異邦人の支配する領域であることが、はっきりと分かります。もし飼っている人がユダヤ人であれば、不法な商売をしていたこととなります。

⁸ あなたがたは、それらの肉を食べてはならない。また、それらの死骸に触れてもいけない。それらは、あなたがたには汚れたものである。

他の動物にも共通していますが、汚れたものは、食べてはいけないだけでなく、死骸についても避けるように命じられます。

2A 水の動物 9-12

⁹ 水の中にいるすべてのもののうちで次のものを、あなたがたは食べてもよい。海でも川でも水の中にいるもので、ひれと鱗のあるものはすべて食べてもよい。

主が五日目に造られた水中の生き物についてです。ここでの清さの区別は、「ひれと鱗」を持つ

ているかどうかです。いわゆる「魚」と私たちが呼んでいるものは清いです。新約聖書では、弟子たちは漁師で、イエス様は復活後も弟子たちと共に魚とパンを食されました。

¹⁰しかし海でも川でも、すべて水に群がるもの、またはすべて水の中にいる生き物のうち、ひれや鱗のないものはすべて、あなたがたには忌むべきものである。¹¹これらは、あなたがたには忌むべきものである。それらの肉を食べてはならない。また、それらの死骸を忌むべきものとしなければならない。¹²水の中にいるもので、ひれや鱗のないものはすべて、あなたがたには忌むべきものである。

鱈や鱗のないもの、つまりイカやタコ、貝、ウナギなどはみな汚れているとみなされます。お寿司の多くは食べられませんね。イエス様は地引き網のたとえを語られましたが、こう言われました。「マタ 13:47-48 また、天の御国は、海に投げ入れてあらゆる種類の魚を集める網のようなものです。網がいっぱいになると、人々はそれを岸に引き上げ、座って、良いものは入れ物に入れ、悪いものは外に投げ捨てます。」この「良いものを器に入れ、悪いものを捨てる」のは、食物規定によります。イスラエル人の漁師は、ひれとうろこのあるものを器に入れ、ひれとうろこのないものを捨てましたが、これを聞いていた元漁師のペテロやアンデレ、ヨハネやヤコブなどは、非常に身近な光景だったに違いありません。

3A 空の動物 13-19

¹³また、鳥のうちで次のものを忌むべきものとしなければならない。これらは忌むべきもので、食べることはできない。すなわち、禿鷲、禿鷹、黒禿鷹、¹⁴鳶、隼の類、¹⁵鳥の類すべて、¹⁶だちょう、夜鷹、かもめ、鷹の類、¹⁷ふくろう、鶇、みみずく、¹⁸白ふくろう、森ふくろう、野雁、¹⁹こうのとりの類、やつがしら、こうもりである。

同じく五日目に造られた空の生き物です。ここでは主に「猛禽類」が汚れたものとみなされます。肉を血のついたまま食べるその姿が汚れている、とみなされています。ノアが箱舟から鳥を飛ばしましたが、行ったり来たりしていました。それは、水面に浮かんでいる死体を食べていた可能性があります。次に鳩を飛ばしましたが、オリーブの木の若枝を加えて戻ってきました。この流れに希望が見えます。鳩は、いけにえにも用いられていて、清い動物です。

そして、エリヤが、雨が降らないと、アハブ王に告げて、彼自身が川のところで、鳥から肉とパンを備えられました。これは、イスラエルがあまりにも汚れて、神から離れてしまったので、鳥でさえがエリヤを助けているという事態を示しています。それから、神の大宴会を思い出してください。主が再び来られて、反キリスト率いる世界の軍隊と戦われて、その死体を猛禽類が食べあさりします。それを神の大宴会と呼んで、神の激しい御怒りを示しています。

4A 四つ足の動物 20-28

1B 羽のある群がるもの 20-23

²⁰ 羽があつて群がり、四本の足で歩き回るものはすべて、あなたがたには忌むべきものである。

これは主に昆虫です。ぶよについて、イエス様がパリサイ人たちが、こして飲む話をされていたのを、先ほど読みました。しかし興味深いことに、飛び跳ねる昆虫は清いのです。

²¹ ただし、羽があつて群がり、四本の足で歩き回るもののうちで、それらの足より高い二本の跳ね足を持ち、それで地上を飛び跳ねるものは食べてもよい。²² それらのうち、あなたがたが食べてもよいものは次のとおりである。いなごの類、毛のないいなごの類、コオロギの類、バッタの類。²³ しかし羽があつて群がり、足が四本あるものはすべて、あなたがたには忌むべきものである。

地上を飛び跳ねるといえば、ばった類ですね。バプテスマのヨハネはいなごを食べていました。律法にかなったものを食べています。

では、ここまで見て来て、一つの原則が見いだされるのです。それは、「**地上あるいは外界に密着しているものは汚れたものとみなされている。**」ということです。

陸の動物では、「蹄が完全に分かれている」姿は地上の上を歩いているけれども、実際の足は地面に面していない姿を見ます。蹄が分かれていないと、そのまま足が地面に接しているように見えます。実際は接していないのですが、ここで大事なものは「見た目」です。後で。猫のように、足の裏のふくらみで歩く動物も汚れているとされていますが、完全に地面に接しています。そして「反芻」している姿は、外界にあるものを取り寄せるのですが、そのまま飲み込むのではなく、噛み分けていく姿を表しています。反芻しなければ、そのまま外にあるものを取り入れています。

新約聖書の中で、天に属するものと、地に属するものの違いを述べています。パウロは、「コロ 3:2 上にあるものを思いなさい。地にあるものを思つてはなりません。」と言いました。天にあるものとは、神の右の座におられるキリストのことであり、そして地上にあるものとは、「淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」です(5節)。

そしてヤコブ書でも、こうヤコブが言っています。「3:14-17 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや利己的な思いがあるなら、自慢したり、真理に逆らつて偽つたりするのはやめなさい。そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。ねたみや利己的な思いのあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」上にあるものは清い、平和、優しい、協調性が

あるのですが、地上のものはねたみや利己的な思い、邪悪な行いです。

したがって、地上にいるようでそこには接していない姿は、「この世で生きているけれども、この世から離れている姿」に見立てることができます。反芻することも、この世から受ける情報をそのまま受け入れるのではなく、熟慮して良いものを見分ける姿に似ています。

同じように水の動物を考えてください。ひれと鱗のある魚は、基本的に水中で生きています。けれども、その二つを持っていない生き物は海底であったり、穴の中であったり、地面に接しているところに生きてることが多いです。そして、鱗があれば自分の体は直接、外界に接していませんが、なければ接しています。

鳥類については、猛禽類は血のついた肉をそのまま食べることになります。血を食べてはならないとする神の命令に違反する姿です。また、見た目にも肉の行いをしている姿です。

そして昆虫については、地面を這っている四つ足の生き物とは異なり、はね足のあるものは空中に飛ぶことによって地面から離れる時があります。ここにも、「地上のものに軽く接しているが、決して密着しない。」という原則があります。

私たちは、この世で生きている限り、この世の汚れに触れざるを得ません。避けることのできないものです。けれども、その汚れに接するときに、交わることもできれば離れることもできます。ルターは、「鳥が私の頭の上を飛ぶのは防げないが、鳥が私の頭に巣を作るのは防ぐことができる。」と言ったそうです。世から入ってくるものは避けられないが、そこに自分を留まらせることをしないことはできます。世とは軽く接していくのであり、深入りしてはいけない、ということです。

2B 死骸による汚れ 24-28

²⁴ 次のことによっても、あなたがたは身を汚すことになる。すなわち、それらのものの死骸に触れる者はだれでも夕方まで汚れる。²⁵ また、それらの死骸を運ぶ者はみな、自分の衣服を洗わなければならない。その人は夕方まで汚れる。²⁶ ひづめが分かれてはいても完全には割れていないか、あるいは反芻しない動物のことについては、これらはすべて、あなたがたにとって汚れたものである。これらに触れる者はだれでも汚れる。

死体は、「罪から来る報酬」を示しています。死は罪によって入ってきました。ですから、罪を避けなければいけないという教えです。ただ、「夕方まで汚れる」という期限があります。これは、日々私たちは洗いによる清めを行っていかねばいけない、ということです。この世における生活で、一日のうちに汚れたものをその日のうちに、神のみことばで清めていただく必要があります。

²⁷ また、四本の足で歩き回るすべての生き物のうち、足の裏のふくらみで歩くものはすべて、あなたがたにとって汚れたものである。その死骸に触れる者はみな夕方まで汚れる。²⁸ その死骸を運ぶ者は自分の衣服を洗わなければならない。その人は夕方まで汚れる。これらは、あなたがたには汚れたものである。

蹄の全くない、足の裏のふくらみで歩いているものと言え、犬や猫、ライオンなどもそうでしょう。士師サムソンのことを思い出してください。死んだ獅子の中にある蜜を食べました。彼は、まさにこの戒めに違反していました。汚れに近づき、そしてついに実際の罪にも近づいてしまった人です。

5A 地に群がるもの 29-38

1B 腹で這うもの 29-31

²⁹ 地に群がるものうち次のものは、あなたがたにとって汚れたものである。すなわち、もぐら、跳びねずみ、大トカゲの類、³⁰ ヤモリ、ワニ、トカゲ、砂トカゲ、カメレオンである。³¹ すべて群がるものうち、これらは、あなたがたにとって汚れたものである。これらが死んだ状態のときに触れる者はだれでも夕方まで汚れる。

地の上を歩く四つ足のものは汚れていますが、こちらはさらに地を腹で這うものが列挙されていて、まさしく地に属する存在を示しており汚れています。もぐらなんかは、地上どころか地中にも入りますね。聖書では地の下に陰府があるとしています。

2B 落ちてくる死骸 32-38

そして次に、この中で、とかげなど、私たちの生活の中に突然入り込むことがあります。その時の汚れについて取り扱っています。

³² また、それらのうちのあるものが死んで何かの上に落ち、それが木の器、衣服、皮、袋など、何かに用いる物である場合、それは汚れる。それは水の中に入れなければならない、夕方まで汚れ、その後きよくなる。

生活をしていたら、家にいても、仕事をしていても、突然天上から、とかげなどが落ちてくる可能性がありますね。そういった時にどのように汚れを清めるかについて教えています。水の中に入れて洗うことのできるものは、洗います。そして夕方になれば、きよくなります。

³³ また、それらのうちの 하나가、どのような土の器の中に落ちて、その中にあるものはすべて汚れる。その器は碎かなければならない。

土の器は、水がしみこんでしまうので、それで洗いようがありません。碎きます。

³⁴ また食べられる物で、それに水がかかっていたら、それはみな汚れる。また飲める物で、そのような器の中にあるものはみな汚れる。

近くに水の入った器があって、その水が飛び散って、自分たちの食べているもの、飲んでいるものにその水が入ったならば、汚れてしまいます。つまり、直接触れなくても、水によって移っていくという原則です。汚れは他に移っていくということです。苦みについて、ヘブル書にはこう教えています。「12:15 だれも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」

³⁵ さらに、どのようなものでも、その上にこれらの死骸の一つが落ちたものは汚れる。それがかまどであれ炉であれ、打ち壊されなければならない。それは汚れていて、あなたがたには汚れたものとなる。

これは、かなり大体な処置ですが、かまどは、パンを焼くためのものを想定しているのでしょう。あるいは陶器を焼くにしても、その陶器が人々の食べ物をのせることとなります。

³⁶ ただし泉、あるいは水のたまっている水溜めだけはきよい。しかし、それらの死骸に触れる者は汚れる。

泉は次々と新しい水を湧き出します。イエス様は、ご自分の与える水は、私たちのうちで泉となり、永遠のいのちに至る水をもたらすと言われました。ここは大事な原則です。私たちが汚れに打ち勝つには、常に泉からの水を下さる、イエスにあずかっている必要があります。汚れから離れるのは、主との命ある交わりが最大の清めです。罪を犯しているときは、その罪に対する弱さ以上に、交わりが希薄になっていることが原因です。

³⁷ また、蒔かれる種の上にそれらの死骸のどの一つが落ちても、それはきよい。³⁸ しかし、種の上に水がかけてられていて、その上にそれらの死骸のあるものが落ちたなら、それはあなたがたには汚れたものである。

興味深いですね、水を種が吸収していなければ、汚れていません。水が吸収されていたら、その種から出てくる芽、苗、そして作物は汚れたものとみなされます。

3B 食べてはならないもの 39-43

³⁹ あなたがたが食用として飼っている動物の一匹が死んだとき、その死骸に触れる者は夕方まで汚れる。⁴⁰ その死骸を食べる者は自分の衣服を洗わなければならない。その人は夕方まで汚れる。また、その死骸を運ぶ者も自分の衣服を洗わなければならない。その人は夕方まで汚れる。

きよい動物であっても、死骸は汚れています。そして死骸を食べても、それを運んでも、衣服を洗わないといけません。そして、夕方にまで汚れています。

⁴¹ 地に群がるものはすべて忌むべきもので、食べることはできない。⁴² 地に群がるもののうち、腹で這うもの、また四本の足で歩くもの、あるいは多くの足のあるもの、これらのどれも、あなたがたは食べてはならない。それらは忌むべきものである。⁴³ あなたがたは、いかなる群がるものによっても、自分自身を忌むべきものとしてはならない。また、それによって身を汚し、それによって汚れてはならない。

地に群がるものは、食べてもいけません。忌むべきものだと主は断じておられますが、それは、地上に属することをよく表しているからです。

以上のものを見てきた中で、ペテロがヤッファのシモンの家で見た幻は、ユダヤ人に彼によって強烈だったことでしょう。「使 10:11-12 すると天が開け、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来るのが見えた。その中には、あらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥がいた。」汚れた動物のオンパレードですね！ペテロが、「主よ、そんなことはできません。」と言ってしまった気持ちもわかります。しかし、それは、異邦人のことを主は示したかったのです。「10:15 神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。」主は、屠って食べなさいと命じられた時点で、きよめてくださっていたのです。だから、きよいのです。ユダヤ人が汚れているとみなしている異邦人も、主が、その信仰によって心を清めてくださっていることを示していました。

4B 聖なる者 44-45

⁴⁴ わたしはあなたがたの神、主であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別して、聖なる者とならなければならない。わたしが聖だからである。あなたがたは、地の上を這ういかなる群がるものによっても、自分自身を汚してはならない。⁴⁵ わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した主であるからだ。あなたがたは聖なる者とならなければならない。わたしが聖だからである。」

ここに、レビ記の主題となることばがあります。「あなたがたは聖なる者とならなければならない。わたしが聖だからである。」ということです。生活のこのような細部に至るまで、主は清いもの、汚れたものを区別されたように、私たちの生活の細部に至るまで、神の聖さを表すように私たちは召されています。アロンの兄息子二人のように、ちょこっと自分の栄光を求めてみよう、ではいけないのです。ペテロがここの箇所を引用して、こう勧めています。「I ペテ 1:14-16 従順な子どもとなり、以前、無知であったときの欲望に従わず、むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。」あらゆる行ないにおいて、とあります。

どうかこの呼びかけに、神からの呼びかけに応えてみましょう。

そして主は、「わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した主であるからだ。」とその根拠を言われています。世を表しているエジプトから主が導き出してくださいました。だから、エジプトの慣わしから離れて、区別されて生活しなさいと呼びかけておられるのです。あらゆるところで、エジプトの慣わしがしみついています。ですから、あらゆるところで、とくに食べることについて、主が聖であることを思うことで、彼らは自分たちが神に聖め別たれた民であり、神を知らない人々と異なることを覚えることが出来ました。私たちも、生活のあらゆるところで、以前の習慣や考え方があるでしょう。しかし聖め別たれて、あらゆるところで聖霊の導きで、汚れているものから離れることができます。

6A 汚れと清さの区別 46-47

⁴⁶ 以上が、動物と鳥、また水の中にうごめくすべての生き物と、地に群がるすべての生き物についてのおしえであり、⁴⁷ それによって、汚れたものときよいもの、食べてよい生き物と食べてはならない生き物とが分けられるのである。

食べるというのは、一つになる、交わりの意味合いが強い行為です。そこに、区別をつけていくことは必要です。次回は女のきよめの期間について、見て行きます。ここにも、女性が出産において汚れるということに、霊的な意味合いが強く反映されています。